

看護学科学生の「自己教育力」を高めるための効果的な支援のあり方 — 国家試験の学習への取り組みに焦点をあてて —

羽畑 正孝
武田 弘美
谷口 由佳
石井 麻紀
川崎絵里香
長尾 厚子

【目的】

国家試験の学習への取り組みに焦点をあて、学生の自己教育力に影響する要因を明らかにし、国家試験合格への効果的な支援のあり方の示唆を得ることを目的とした。

【研究方法】

1. 研究対象：本学看護学科の1年次生、2年次生、3年次生
2. 調査期間：平成22年度前期授業終了時および22年度後期授業終了時の2回実施した。
3. 調査内容：西村らが梶田の自己教育性尺度に10項目を加え、信頼性と妥当性を検証した自己教育力測定尺度を使用した無記名自記式質問紙（全40項目）に、属性のほか、「現在の学習状況」、「国家試験に向けての取り組み」、「職業意識」などに関し、独自に作成した項目を加えた自記式留置法で行った。
4. 分析方法：分析には統計ソフトSPSS 19.0、Regirion19.0 for Windows を使用した。
5. 倫理的配慮：本研究は本学研究倫理委員会の承認を得て開始した。

【結果】

1回目の調査の回収数は、1年次生82名、2年次生49名、3年次生77名であった（有効回答率90.3%）。各学年において自己教育力の平均得点は、側面Ⅰ【成長・発達への志向】が高く、側面Ⅳ【心理的な土台】は低かった。各側面の学年別の比較では、側面Ⅰ【成長・発達への志向】は、学年が上がるにつれて低下している。側面Ⅱ【自己の対象化と統制】、側面Ⅳ【心理的な土台】は、2年次に上昇し3年次に低下し、側面Ⅲ【学習の技能と基盤】は2年次に上昇し3年次に維持している。

自己教育力と「国家試験の学習への取り組み」との相関をみると、すべての学年において側面Ⅲに正の相関がみられた。さらに、1年次では側面Ⅱ、2年次では側面Ⅰ、Ⅱ、Ⅳにおいても正の相関がみられたが、3年次では側面Ⅲとの相関のみになっていた。

【考察】

今回の調査結果から、多くの先行研究で報告されているように本学の看護学生においても全学年で側面Ⅳが低い傾向がみられた。これは、青年期の自己同一性の確立という発達課題を抱える大学生の特徴を示していると考えられる。また、3年次で側面Ⅰ、Ⅱ、Ⅳが低下しているのは、学年が上がるにつれて、より専門的で難易度が高い学習内容となり、自信を失いがちになることが影響していると考えられる。

また、国家試験の学習への取り組みでは3年次に相関がみられない側面への支援が必要である。梶田は、側面Ⅳは他の3側面すべてを一人の人格の中に落ち着かせ、安定した土台の上に立っての前進を可能にする心理的基盤としている。そこで、学生の心理的な安定を支える関わりも、主体的な国家試験の学習への取り組みに重要であるという示唆を得た。